安藝の國隱戸の瀨戸といふ海あり、此所は國の南の山遙に突出て、六七里海上に出たり、其山の陸地に連る所甚だ細ければ、海へ出たる所程を山をほり窟て切り通ふして、舟のかよふ海路を別に造りしなり、其所人力を以て切明たりし事なれば、兩方の岸せまり居て、其間の潮行甚急にして、舟人の恐るゝ所なり、何人の切通せし事にやと尋るに、むかし平清盛安藝守にて此國に居給ひし時、舟にて每度往來に此所に至り、出崎の山にさへられて、遙の南の方へ廻りて、十里餘も海路遠くなれば、此所を通り給ふ度每にいかりて、此出崎の山を切通し、舟を眞直に遣るべし、と下知し給ふ、人皆此事を人力の及ぶ所にあらざるべしと恐れしかども、清盛の下知やみがたくて、數万人の力を以て、終に陸路に連る所を斷切て、舟の通ふ海を造りなせり、其後は數百年の後も其恩をかふむりて、上り下りの舟路近く行事を得るなりとぞ、余○橘南溪兵庫に遊びし時、築島を見て、清盛の志の大にして豪邁なる事を感じ驚きしが、又此事を聞て、一世に威をふるひ給ひしも、其故なきにあらざりしと、其世の事までを思ひやりし、

〔筑紫紀行〕〔二〕かまかりといふ小湊あり、人家百軒程ありといへり、此邊の船路をかまりの瀨戸といふ、また半里程にして長濱左にみゆ、人家あり、此邊より西の方は南海の地廣遠にみゆ、伊豫の國界なり、かまかりより南、かろふとゝいふ湊をすぎて、おんどにいたる、またおんどの瀨戸といふ、忠海より此所まで十三里餘山を後にしたる小みなとにて、人家二百軒ばかり、南より東へむけて濱邊にたちつゞけり、寺三四箇寺みゆ、昔平相國清盛公、嚴島の御神を拜まむと祈誓ありしに、明神大蛇と化して見へさせ給ひければ、相國恐れたまひて、東のかたに漕戻させ給ふに、折しも向ひ汐にて、船のぼりがたかりしかば、相國怒り給ひて、舳先にたちて海上を疾視給ひしかば、汐逆に上のかたに引しとなり、さるによりて此瀨戸の一名を清盛のにらみの瀨戸ともいふとぞ、例の船人はかたりける、瀨戸間一丁ばかりにして、至て狹く淺瀨おほし、此瀨戸をすぎて西の方四里程にし